

昆虫の集まる花木は危険か

最近公園や庭などにアベリアをよく見かけますね。アベリアという名前になじみがなくても、6月頃から10月頃まで白い小花をたくさんつける植え込みの木と言えば「ああ、あれか」とわかるおなじみの花です。花はほのかによい匂いがします。花が次々と咲き続けるので、いろいろな昆虫が蜜を吸いにきます。

このアベリアに、スズメバチが来るから切ってほしいという苦情がみどりと公園課にあったそうです。そのアベリアが通学路にあたる公園の植え込みになっており、子供が刺される危険があるというのです。

この話はいろいろなことを考えさせられます。

一つは、スズメバチには強い毒があるから、スズメバチが花の蜜を吸いに来ているら、万一のことを考えると切らなければならないのかということ。

もう一つは、都会にすめなくなった生き物は数多くあるが、公園等の緑化によって都会にすむ生き物も少なくない。「身近に自然を」を言うときイメージするのは、チョウ、トンボ、カブトムシ等で、その他大勢の虫のことは無関心です。無関心を通り越して刺さなくても害虫扱いし、刺す虫、毒のある虫は絶対許さない、虫に対する包容力が小さい都会人が増えたら困るなあと感じます。

私が以前住んでいた新宿区では平成7年度から「生き物と共生し ふれあえるまちづくり」を進めています。だいぶ前の話ですが、新宿区の広報で庭に生き物を呼ぼうという記事を見て、私は低木のアベリア、ユズ、ブッドレアが植わったチョウを呼ぶ花木のプランターを申し込みました。参加者はプランターに来る生き物を観察し毎月結果を報告するのです。

目白駅近くの都心の集合住宅、しかもベランダには屋根があるので、昆虫が来るのか、報告できるような結果が得られるのか心配でした。

高さ30cmほどのユズにアゲハチョウが卵を産み、鳥の糞のような幼虫がかえり、何度か脱皮して青虫になりました。アゲハチョウは次々と来ては、卵を産みましたが、いつも青虫になったとたん鳥（たぶんスズメ）のご馳走に。生き物の世界は厳しい。アベリアの花にはシジミチョウ、セセリチョウ、ハナアブ、クマバチ、ミツバチ、オオスカシバ、ホシホウジャク、その他図鑑で見てもわからないもの等々。オオスカシバとホシホウジャクは花に止まらずに、空中で羽を激しく動かし、ホバリングしてストローのように口を花に差し込み蜜を吸います。器用で見ていて飽きません。夜来て蜜を吸う虫もいます。アベリアは花の咲く期間が長く、虫たちがよく集まるので、な

ぜアベリアが選ばれたか納得が이었습니다。驚いたことに、コカマキリの卵が産み付けられ、翌春、孵化し、吹けば飛ぶような小さな子供コカマキリが数匹出できました。

新宿区の集合住宅でも蜜源があれば虫がくること、虫たちも健気に生きていることを自分の目で確かめ、感激。散歩で生き物に出会うのが楽しみになりました。

ところでホバリングして蜜を吸うオオスカシバは大きいので「オオスズメバチだ」と思っている人も少なくないと思います。そう言う何人かに「これは蛾の仲間です。刺さないから大丈夫」と教えてあげたことがあるからです。子供のときアシナガバチの巣を突いて刺された経験がある人は多いはずですが、今やそのアシナガバチも駆除の対象に・・・

身近に自然を感じなくなると、身近な生き物との付き合いもわからなくなる、それが心配です。都会の自然が大切だと言うとき、あまり好きでない生き物の住む権利を認めることだと思うのですが・・・(坂本 郁子)



アベリアの花に来るクマバチ(左)とちょっとピンぼけのオオスカシバ(下)

